HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	２つの第２言語習得モデルをどう見るか ： Keith Johnsonの講演の批判を通じて
Author(s)	小山内, 洸
Citation	教授学の探究, 4, 1-8
Issue Date	1986-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13529
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_p1-8.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2つの第2言語修得モデルをどう見るか
—Keith Johnsonの講演の批判を通じて—

小山内　洸
（北海道教育大学釧路分校）

はじめに

第24回（1985年）大学英語教育学会（JACET）全国大会の“guest speaker”は，イギリスのUniversity of Readingから招かれたKeith Johnsonであった。Keith Johnsonと言えば，Communicative Approachの有名な唱導者で，数多くの理論的な著作だけでなく実践的な教材の執筆者としても知られている。彼が掲げた“Communicative Language Teaching: future developments”という演題は，時宜に適っていて謹聴に値すると思わせたのであったが，実際に聴いてみるとその内容はいま1つ説得力を欠いていた。Communicative Approachの将来について彼が示唆した方向は，かえってこの言語教授理論に関する今後の研究課題を，不明確にしてしまうような印象を受ける。なぜ，このような印象を受けたのか。私はその理由をこの小稿で少し詳しく述べてみたい。表面的には，上記の学会におけるKeith Johnsonの講演に対する批判という形を取るが，そのことを通じて，私なりにCommunicative Approachの将来展望を考えてみようと思う点に，真意がある。

1．2つの言語修得モデル

2つの言語修得モデルの1つは，Keith JohnsonがAcquisition Modelと呼ぶところのものである。彼はこの修得モデルを下に掲げる2点で特徴づける。

(1) 自分の接する言語資料から言語修得装置（Language Acquisition Device—LAD）に導かれて，その言語の文法を作り，この文法に基づいて発話を組み立てるという点で，第1言語と第2言語の修得過程は基本的に同じであると見なす。

(2) 内在的シラバス（built-in syllabus）に基づく自然な言語修得順序があるという前提に立ち，言語項目を予め一定の順序に配列した教材による，学校の授業の役割を重く見ない。

いま1つのモデルを，Keith JohnsonはCommunicative Modelと呼び，その基本的な特徴を，下に示す2点において認める。

(1) 意味の伝達は，話者と聴者が互いに情報を交換し，「情報の差」（information gap）を埋めるための活動である，と見なす。その過程は，話者が何事かを伝達しようとする意図を持ち，その意図に沿って必要な言語的手段を選択し，そして情報を相手に伝える，という3つの段階に分けて考えることができる。

(2) 学校における第2言語の授業に，「情報の差」を利用した言語の運用練習やドリルを積極的に取り入れて，学習者が目的意識的に情報を伝達したり，選択的に情報を受け取ったりする力をつけることを重視する。

Keith Johnsonによれば，Acquisition Modelの最大の関心事は，「自然な言語修得過程にい

かにして干渉しないか」ということである。つまり，意味理解の可能な一時的言語資料がLADに到達するかいなかが，発話能力獲得の前提条件であって，その条件が満たされれば発話は「自然に」始まる，という見地にたつ。もう一方のCommunicative Modelの最大の関心事は，「外国語を含めて，第2言語の使用にはどんなスキルが関与するかを明らかにする」ことである。なぜなら，第2言語の修得において，“how people learn to use skills”という問題を避けることはできない，と考えるからである。

以上が，Keith Johnsonによって対立的に描き出された，2つの第2言語修得モデルの特徴点である。この後Keith Johnsonは，Communicative Modelに基づく言語教育を進めるにはスキルの獲得過程を明らかにする必要があると指摘し，スキルの獲得を重視した言語教育モデルをSkill-based Communicative Language Teachingと名づけることを提案した。しかし，ここですぐその提案の内容の紹介に進む代わりに，Keith Johnsonが対置した2つの第2言語修得モデルの実体について，私自身の知識によって，もう少し分かりやすい説明を付け加えてみよう。2つのモデルの違いをはっきり理解することが，後で両者の長短を論じる場合の前提になるからである。

一般的に言って，理論モデルとは，理論の枠組み，ないしは見取り図のことである。それはある問題を解釈するさいに考慮すべき不可欠な要素をどう特定し関連づけるかを明らかにしようとする。従って，ある問題に関する理論モデルは，その問題の全体像を把握して，研究の課題と方向を見通すことを目的とする。1つの理論モデルが確立されれば，それと違った考えかたが現れた場合，どこがどう違うかを明らかにしやすい。

第2言語の修得に関する理論モデルは，その過程，順序，成功度を左右する要因などを関連づけて，首尾一貫した姿で全体像を浮かび上がらせなければならない。Keith Johnsonが指摘したとおり，いま有力な理論モデルは，Acquisition ModelとCommunicative Modelの2つである。前者はCreative Construction Modelと，後者はSkill-learning Modelと呼ばれることもある。現在，Acquisition Modelの影響力が強まっているように見える。

Acquisition Modelが依拠する仮説は，次のように要約してよいだろう。すなわち，第2言語の修得は，あくまで目標言語が実際に伝達の道具として使用されているコミュニケーション場面に接して，その作用を受けることで進むのであって，目標言語それ自体を意識的に生み出そうとする試みには直接依存していない。言い替えれば，目標言語による発話は，その言語の文法を内面化したことの結果として自然に生ずるのであって，文法を内面化するプロセスに貢献する要因となるものではない。下にいま述べたことを図式的に示してみる。

第2言語を浴びる ― 自然な処理方略（LAD）の発動 ― 文法の内面化 ― 発話

このモデルを支える具体的な証拠は，上の図式の最終段階の発話を研究することから得られる，と考えられている。なぜなら，発話を分析することによって，学習者がどのような文法を内面化したのかということを知ることができるからである。例えば，発話の中に含まれるエラーを分析することによって，エラーという形の「文法規則」に学習者を導いたLADの働きについて一定の仮説を得ることが可能である。

いままで見てきたように，Acquisition Modelの前提となっているのは，発話スキルは自然に「現出する」(emerge)，という仮説である。この点は，Keith Johnsonが言うCommunicative Model，別名Skill-learning Modelと際立った対照をなす。なぜなら，Skill-learning Model

の根底には，文型ドリルや問答練習を通じた発話活動を促すことによって，目標言語の文法の内面化，すなわちその文法を無意識的に操作できる段階にまで，学習者を導くことができるという仮説が横たわっているからである。Skill-learning Model は，(1)発話活動に積極的な役割を認める，(2)インプットが統制されたサンプルの提示である，(3)学習者が内面化すべき目標言語の文法を外側から順序を追って与える，という3点において，Acquisition Model と明らかに違っている。従って，先に Acquisition Model について行ったのと同じように，その特徴を図示してみれば，以下のようになるであろう。

目標項目の学習（インプット）— 発話練習 — 与えられた文法への同化 — 即時発話

Skill-learning Model は，第2言語の運用に含まれるスキルの側面を強調する。すなわち，第2言語を適切に使用するには，その言語の文法や語いに関する知識を持つと同時に，その知識を現実場面に合わせて自動的な行動に転化する技能的な能力（スキル）を持たねばならない，と考えるのである。そして，このようなスキルは，知識を行動に変える多くの練習を積んでこそ獲得される，という前提に立つのである。ここに，Skill-learning Model が発話練習に大きな役割を認める理由がある。

1つのスキルが学習されるときは，目標となる行動がいくつかの構成部分に分離され，個別的に練習されるのが普通である。例えば，“ship”と“sheep”の発音の区別，「個物の数を確認する」ための疑問文の形式などを練習することなくして“How many ships do you see in the harbour?”という文を即座に発することはできない。Skill-learning Model にあって，このような部分的なスキル獲得練習は，“part-skill practice”と呼ばれる。スキルは，全体的にも練習される。それは，構成部分を統合した行動全体の練習である。例えば，あるトピックで会話に従事したり，手紙を書いたりする練習である。このような練習は，“whole-task practice”と呼ばれる。“part-skill practice”にせよ，また“whole-task practice”にせよ，その内部に，広い範囲にわたるさまざまな段階の難易度が想定されることは言うまでもない。

言語運用の全体的なスキルを部分的なスキルに分割することは，言語運用という行動の階層的な性質のゆえに可能となるものである。言語運用は，いくつかの“task”の集合体と見ることができる。また，それぞれの“task”は，さらにいくつかの下位の“tasks”から成り立っている，と考えることができる。例えば，「友人を説得して映画に誘う」というコミュニケーション上の目標を達成しようとすれば，次のように，階層をなしているいくつかの“tasks”を首尾よく遂行しなければならない。まず，いきなり「映画に行こう」と切り出すか，映画の題名を出して，まだ見てないかどうかを確かめるか，それともその映画の良さを述べるか，など「説得」のための方略を決定するという“task”があるだろう。ある方略が決定されれば，それを実行に移すためのトピックと文型を選択するという“task”があるだろう。次の段階には，ここで決定したトピックと文型を具体的な句や語で満たす“task”が来るだろう。そして最後に，このようないくつかの段階を経て，例えば“Won't you go to a movie with me this evening?”という文を実際に言うとなれば，そこには筋肉運動を伴う複雑な“task”がある。

ところで，上で述べたさまざまな“task”のうち，より高いレベルに位置するもの(e.g.「説得」の方略の決定)は，意識的に遂行されるだろう。しかし，より低いレベルに位置する“task”(e.g.「説得」の方略を実行に移すための文法や語の選択および実際の発語）は，殆ど無意識的に遂行されるだろう。なぜなら，十分な発話能力を備えれば，そのような“task”を即座に

遂行するスキルを，長期記憶の中から自動的に呼び出すことができるからである。一般的に言って，人間の意識的な注意力には限りがあるから，言語運用のさい，より高いレベルの“task”とより低いレベルの“task”に，同時に等量の意識的な注意を向けることは，殆ど不可能である。したがって，第2言語の運用能力がまだ十分に備わっていない学習者は，長期記憶の中から自動的に呼び出すことができるスキルのレパートリーが小さいために，より低いレベルの“task”に必死で注意を向けがちである。その結果，「言いかた」に気を取られて，「言いたいこと」を見失うことが少なくない。Skill-learning Modelでは，下位レベルの“task”を自動的に遂行するスキルを，練習によって身につけることで，このような問題を解決できる，と考えるのである。

さて，いままで2つの第2言語修得モデルについて多少の説明を加えてきたのだが，ここで両者の対比を一応締め括ろう。Acquisition ModelもSkill-learning Modelも，目指すところは同じ，と言ってよいだろう。どちらも，どうすれば第2言語の学習者が伝達意図に応じて即座にその言語を運用する能力を身につけることができるか，という問題を解決しようとしている。しかし，問題解決のアプローチは違う。Acquisition Modelにあっては，自然な言語環境の中での無意識的な修得過程が重視される。それに対して，Skill-learning Modelにあっては，部分的なスキル獲得学習を積み重ねることが重視される。その意味で，前者の特徴は“naturalistic”であり，後者の特徴は“didactic”である，と言うことができる。

2．Keith Johnsonの講演の問題点と英語教育の課題

ここで，もう1度Keith Johnsonの講演の内容に戻ってみよう。前節の最初に紹介したように，彼はまず2つの第2言語修得モデルを対比して，それぞれの特徴を明らかにした。続いて，彼は非言語的なスキルの形成について今日知られていることに目を向けた。彼は，非言語的な例としてテニスやゴルフに言及しながら，一般にスキルは3つの段階を経て形成されるものであるという見解を披露した。その3つの段階とは，(1)認知段階(Cognitive stage)，(2)連合段階(Associative stage)，(3)自律段階（Autonomous stage）である。Keith Johnsonによれば，スキルを教える方法という点で，(1)は「提示」（presentation）に，(2)は「練習」（practice）に，(3)は「産出」（production）に，それぞれ関係づけることができる。そして，このような関係を，スキルとして第2言語を修得させる場合にあてはめて考えてみると，(1)に関係する「提示」という点では，「説明（explanation）より示範（demonstration）を重視する」，(2)に関係する「練習」という点では，「ある文構造を1つの場面で使えるようになったら，すべての場面でそれを使えるようにする」，(3)と関係する「産出」という点では，「習熟のレベルまで練習を重ねてスキルを無意識化し，注意が言語の形式よりは意味に向かうようにする」という3つの教授原則が引き出される，とKeith Johnsonは言う。最後に，将来の課題として，“Skill-based Communicative Language Teaching”と名づける理論モデルの確立の必要性を彼は強調した。このモデルは，Acquisition Modelでは説明できないことをも説明できるという点で，それよりも優位に立つ，とKeith Johnsonは言う。なぜなら，Acquisition Modelでは，「学校における授業」の意義を明確にすることができないが(cf.「モニター仮説」)，Skill-based Communicative Language Teachingという理論的な枠組みのなかでは，そのような不都合は生じないからである。

いま上で見たように，Skill-based Communicative Language Teachingと名づけられるモデルの根底にあるのは，「見て（聞いて），練習して，慣れる」という比較的単純な学習原理で

ある。勿論，たんに単純であるという理由で，このような原理を否定してよいということにはならない。なぜなら，“Practice makes perfect”というよく知られたことわざを持ち出すまでもなく，われわれの経験的な言語学習観の中には，「練習」の重要性がしっかりと刻み込まれているからである。しかし，このモデルは，「教授方法としての機械的な反復主義」を許容する，という弱点を持つ。新たな言語を学習するさい，反復という方法は公認された有効性を持つが，教授者がこの方法にのみ頼ることに問題があることは，改めて指摘するまでもないだろう。とりわけ，学習項目の「提示」に関して，「説明（explanation）より示範（demonstration）を重視する」という一般論で済ますのは問題である。この段階で，学習者の記憶に残る可能性の高い発話の性質とその提示方法を探求することなしに，いま触れたような一般論を持ち出しても，殆どなんの有効性も持たない。従って，この点に関して，Keith Johnson は Acquisition Model の唱導者のあいだで生み出されている研究成果に言及してしかるべきだったのである。

第1言語としての英語の修得過程の研究において，“caretaker speech”と呼ばれる特別な種類の発話の重要性が注目されている。言うまでもなく，子供は周囲（母親を含む周囲の大人や年上の子供など）から多くの言葉を浴びせかけられるが，その中には明らかに大人どうしで交わされる発話とは異質の特徴を持つ発話が含まれている。それが“caretaker speech”で，下に掲げるような特徴を持つ。

(1) 一般にゆっくりと話される
(2) 普通の発話より短い発話を多く含む
(3) 普通の発話より文法的に正確で，非文法的なこまぎれ文や誤った出だしの文が少ない
(4) 複文が少ない
(5) 時制の種類が少ない
(6) 使用される語いの範囲が限られている
(7) 反復的な言いかたが多い
(8) 発話が眼前の現実場面に緊密に結びついている

以上のような特徴を持つ“caretaker speech”は，第1言語としての英語の修得を助けるものと考えられている。つまり，“caretaker speech”は，(1)聞き取りやすく，文法構造が簡単，(2)少ない言語能力でも理解できる，(3)繰り返しが多く，意味は現実の場面に緊密に結びついている，などの特徴を持つのである。従って，それは特別な種類の言語インプットであり，第1言語としての英語の修得過程において重要な役割を果たしているのでないかと考えられるのである。こうした“caretaker speech”の特徴は，第2言語としての英語修得を促進するインプットの性質を考える上でも，ヒントになっている。

第2言語としての英語の修得を促進するインプットの性質について，Acquisition Model の支持者のひとりである Stephen Crashen は，4つの条件を挙げている。すなわち，(1)理解度(comprehensibility)，(2)興味と関連性(interest and relevance)，(3)文法的連続の不必要性(no need for grammatical continuity)，(4)量（quantity）の4つである。Krashen が言うところに即して，それぞれをごく簡単に説明しておこう[1]。

第1に，理解度という条件は，言語的および非言語的の2つに分けて考えることができる。言語的には，(1)ゆっくりしたテンポの，はっきりした調音で話す，(2)スラングやイディオムを避けて，頻度の高い単語を多く使う，(3)易しい構文，つまり短い文を使う，などの条件が挙げられる。また，非言語的には，(1)実物や絵で理解に言語外のサポートを与える，(2)“totally unknown”

であったり“too familiar”なトピックを選択しない。前者が理解されないのは勿論だが，後者も興味が持てないために理解されない，(3)メッセージの内容は，学習者が聞きたい，読みたいと思うものでないと受け入れられない，などの条件が挙げられる。

第2に，興味と関連性という条件は，「面白く，かつ／または，役にたつ」ことである。ただし，この条件は，(1)クラスの生徒の目標，興味，生活背景が教師のそれと違うし，また生徒どうしでも違うのと，(2)興味や関連性がインプットの条件であることが広く認められていないという2つの理由から，非常に満たしにくいだろう，とKrashenは言う。

第3に，文法的連続性が不必要であるという条件は，次のような理由で導き出されるものである。(1)レッスンごとに1つの文法構造を焦点化することは，クラス全員が同じ“i+1”を持つ，言い替えれば，第2言語についてクラス全員が同じ修得水準にある，と仮定することになる。文法的な連続性がなくても，自然なインプットはさまざまな文法構造を豊富に含むだろうから，それが理解されるなら，十分な量のインプットがある限り，すべての人に“i+1”がいきわたることになる。(2)それぞれの学習者にこまかく波長を合わせて連続性を持った文法構造を提示しようとすれば，それぞれの構造なり規則なりを1度だけ提示することになるだろう。復習というものがあるが，普通それは連続した活動全体をやり直すものでなく，一応内在化されたと見なされる規則に，なんらかの練習を付加するに過ぎない。もし，ある文法規則が教えられる最初の授業でそれを学びそこなえば，復習はもう役にたたない。(3)文法に焦点を当てれば，コミュニケーションがつねに苦しくなる。教師や教材作成者の気持ちは，ある文法構造をどう“contextualize”するかという点に向いてしまい，意味内容をコミュニケートするというところから離れてしまう。

第4に，量という条件は，「適正なインプットは十分な量がなければならない」ということである。第1言語の修得過程では，かなりの期間にわたるいわゆる無言期があるが，それは第2言語の修得過程においても同じことだという考えかたである。「インプットの量を時間で特定するのは難しい」と断りながら，Krashenは第2言語で無言期を脱する期間として，ヨーロッパ系の言語で720時間，そうでない言語（アラビア語，朝鮮語，中国語など）で1,950時間という数字を挙げている。また，Krashenは，インプットの量を増す方法として，暗号解読的な難解なパラグラフよりは大量の易しい教材を読むこと，文法的に焦点を絞った聴解練習をやるよりは多くの会話に参加すること，などを勧めている。

いま上で紹介した，いわゆるインプット仮説は，Acquisition Modelを支えるいくつかの仮説のうち，かなりの妥当性を持つと見なしてよいものである。Acquisition Model それ自体は，「自然なインプット」の重要性を強調するあまり，意識的な「学習」(learning) と無意識的な「獲得」(acquisition)を“both-and”の関係ではなく“either-or”の関係に置くために，第2言語修得の全体像を単純化してしまうという大きな問題点を持つ。言うまでもなく，第2言語の修得過程は，「意識」の有無という単純な図式で解明できるものではない。それは，目標言語の運用知識や技能を身につけることは勿論だが，学びかた・考えかたを学ぶこと，および態度・人格の変容までもが問題になる，複雑な過程である。従って，それを研究するには，いつも広い視野に立つことが必要である。つまり，教育的・社会的・心理的な複合的視点の設定が必要なのである。

教室場面での学習が中心となる，例えばわが国の英語教育のモデルを考えるのに，自然な環境での慣れが中心となる，例えばアメリカの第2言語としての英語教育のモデルを引き写すこ

とは，もとより誤りである。Acquisition Model は，アメリカなどで英語を生活上の必要から第2言語として身につけざるを得ないさまざまな年齢の長期，短期の移住者の英語修得過程を追究することから，定式化されてきたモデルである。従って，言語環境の面で大いに異なるわが国の英語教育のあり方が，多かれすくなかれ Skill-learning Model に則って考えられてきたことは当然であり，いますぐそれを放棄せよという主張は現実性を持たない。その意味で，Keith Johnson が Acquisition Model に批判的な立場をとり，Skill-learning Model の充実という観点から，Skill-based Language Teaching という理論モデルを提案したことは，それとして納得のいくことではある。しかし，上で述べたように，おもにインプットのあり方をめぐって，かなり強力で発展性のある仮説が Acquisition Model の中で形成されてきているのも事実である。アウトプットの成果がインプットの質と量に規定されるという問題提起は，人々の直観に訴えるものを持っている。Keith Jonson の講演に私が不満を感ずるのは，このような現にある問題提起を素通りして，“Automisation [sic.] provides mechanism whereby learned material becomes 'subconsciousised' (so that indistinguishable from Krashen's 'acquired output')”[2] という結論に一足飛びに到達したことである。これは，2つのモデルの出力部が同しであるから入力部の違いは検討する必要がない，と言っているのと同じである。これではとても2つのモデルの優劣を論じたことにはならず，従って結論も迫力を欠くことにならざるを得ない。

私見では，Skill-learning Model に則ってわが国の英語科教育を改善充実するポイントは，2つあると思う。1つのポイントは，Keith Johnson が「あまり検討することはない」と言って通りすぎた「認知段階 (Cognitive stage)」そのものにあるだろう。ここは，英語そのものの研究と学習者の認識過程についての研究が交差するところである。従ってそこでは，英語という言語とその学習者，という異質の対象を同時に見据えながら，教材とその提示方法を研究することが必要となるのである。英語という言語の研究に関して言えば，伝統的な英語学や新言語学の成果はもとより，英語の教材編成原理に新たな視点を導入した Wilkins の “Notional Syllabus” 論を含めて，かなりの研究成果の蓄積がある[3]。しかし，学習者が喜んで吸収するのはどのような形でどう提示された英語かという問題は，まだ本格的に研究されていない。上述したインプット仮説にしても，英語学習に伴うと予想される心理活動—例えば，注意，識別，模倣，記憶，練習，探究，整合，推測，比較，対照，推断，仮定，概括，検証，立案など—と，学習の成否を左右する人格的な要素—例えば，根気，意欲，快活，不満，反感など—を全面的に考慮したものではない。従って，インプット仮説は，いま指摘した心理活動や人格的要素を考慮しながら，今後さらに実験，観察，経験の総括などの方法によって，その妥当性を確かめ，発展充実させていく必要がある。

いま1つのポイントは，Keith Johnson が言うスキル形成の第3段階，すなわち「自律段階 (Autonomous stage)」にあるだろう。この段階で最も大きな問題となるのは，いかにして学習者から練習に対する自発性を引き出すかということだろう。練習のための言語材料の形式や意味が教授者によってどの程度統制されるにせよ，もし学習者が自ら積極的に練習に取り組むなら，当然大きな学習成果が得られるのである。そのための鍵が「英語でコミュニケートできる喜び」の中にあることは確かである。学習した英語が実際にコミュニケーションの道具として多少でも役にたつことを実感すれば，それがさらに一段高い水準を目指す学習動機に転化することは間違いない。この点に関して，いわゆるインフォーマントをどう使うかという古くて新

しい問題があるが，より本質的な問題は，日本人どうしの教授者と学習者のあいだであっても，いかにして“authentic”な言語使用に近い体験を練習を通して与えるかということである。この問題を解決する鍵は，一面で教授者の英語能力の向上にあるが，もう一面でそのような練習を可能にする教授技術を開発することにあると考えられる。

〈Notes〉

1) Stephen D. Crashen, *Principles and Practice in Second Language Acquisition,* Pergamon Press, 1982, pp. 57−82.

2) Handout by Keith Johnson.

3) cf. 拙稿『Communicative Approach の教材編成原理の研究(下)—シラバス構成論を中心に—』, 北海道教育大学紀要（第一部A），昭和60年9月.